〔後拾遺和歌集二十釋教〕維摩經の十喩のなかに、この身芭蕉のごとしといふこゝろを、

前大納言公任

風ふけばまづやぶれぬる草の葉によそふるからに袖ぞ露けき

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年七月九日、藥師堂谷邊、有獨住僧號淨密、於件坊前庭優曇花開散之由風聞、鎌倉中男女爲觀之成群、自二品政子遣遠藤左近將監爲後被見之處、芭蕉花之由申之云云、

〔鵞峯文集一賦〕芭蕉不耐秋賦　癸卯七月廿五日勿齋卽席

芭蕉芭蕉吾感其榮枯之有時、維葉之卷漸展而垂、維花之生先結而披、豈信湘水之夢妄感彭氏、唯想窻外之雨驚回牧之、維秋風之暴、葉破而萎、露華之脆、花凋而衰、誰不傷哉、誰不悲哉、試比愛寵之廢、孰與相如於卓文君、譬之壯士之老、奈何覇陵之舊將軍、猶期雪中之殘葉、摩詰之墨痕有聞、對此豈不勵節義哉、見歷代忠臣之勤、嗚呼芭蕉枝葉雖枯、知本根之在、待來歲之再榮、勿恨秋風之不耐、匪啻此物之感人、人亦可隨時進退、何必憐敗葉之見於外、不悟本心之存於內哉、

〔芭蕉翁文集〕芭蕉を移す辭

菊は東籬にさかえ、竹は北窻の君となる、牡丹は紅白の是非ありて、世塵にけがさる、荷葉は平地にたゝず、水清からざれば花さかず、いづれの年にや栖を此境に移す時、芭蕉一もとを植ゆ、風土芭蕉の心にや叶ひけん、數株莖を備へ、其葉茂り重りて庭をせばめ、萱が軒端もかくるゝ計なり、人呼て草庵の名とす、舊友門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、所々に送る事年々になん成ぬ、一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破んとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたり近き人々に、霜の覆ひ風のかこひなど、返す〳〵頼み置て、はかなき筆のすさみにも書殘し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅ねのむねにたゝまり、人のわかれ、芭蕉のなごり、ひとかたならぬ侘しさも、終に三とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉に涙をそゝぐ、今年五月の半、花た